三十一話

昔、むがし、年よった母親ど、たった二人でくらしてえだ、若え者あったけど。この若え者ア仙北の方がら、色白のめんこい嫁コもらたど。若え者ア毎日あさみしけば、山子にでがげで、晩げおそぐなねば、家さ戻どねたえに、年よった姑ど嫁コやどとしてえるおだけど。

一日たち又一日たづうぢに、嫁コのつらコアぞんだんに、青ぐなてきたけど。姑ア見るに見かねで、「嫁コどな、嫁コどな、が、どしてそ青ぐなってきたおでエ。腹コでも痛おだな、頭コでも痛おだな。わげ話して見でねが。」てへたば、嫁コア面コ赤ぐして、「なに、なでもねおだんし。」てへたど。「うにゃ、うにゃ、がどおれどたった二人コだおの、なんもひょしがるごどアねへんて、話して見でねが。」てへたば、嫁コアますます赤ぐなって、「はえ、それだばさべるども、笑ねでたもれ。ほんとア、おれアわらしたがら屁たれで、家さえだ時ア、毎日大きた屁たえでえだおだけども、嫁コにきてがらそもなねども、がまんにがまんしてだば、青ぐなたおぞんし。」てへたど。したば姑ア、「それアむじょいごった。昼間、がどおればりで誰もえねごったし、気がねなぐたれろ。」てへたば、嫁コア、「へだども、おれの屁ア余り強ふて、お前さんが飛ばさえればなねおんし。」てへたど。「なになに、おれア火づぎさたもじがてらへんて腹一ぺいたれろ」てへたば、「へだらお前さん、飛ばさえねえに、びんとたもじがてえでたもれ。」てへてらけじア、きゃらぐでもゆたえだ屁、「ビーッ」とたえだど。姑ア飛ばさえね気なて、死にぎりで火づぎさたもじがてえだけじども、火づきもじら飛ばさえで、庭の土間さがったり落ぢで、腰打ってえのげなぐなたど。嫁コアどでんして、嘆さするだが水くんでくるだが、おろおろしてるうぢに、ばんかたになって山がら若え者ア戻てきて、「なにしたおでエ、どうしたおでエ。」て聞いだど。嫁コア泣ぎながら、そのわげさべたば、「えがなものア、なんぼたれでもえてへたがらて、そのくらい強い屁たれる馬鹿あるだな。」て、嫁コの尻どんとただいぞば「ビーッ」又、どんどんど打いだば「ビ、ビーッ」ど屁たれだど。若え者もあぎれでしまて、「がみだえたやづア、この家さおけねへんて、出で行てしまれ。」て、ほださえでしまたど。

嫁コアしかだなしに、行ぐあでもなぐ歩いて来たば、隣り村の大きた梨の木のある家の前さ、さしかがたど。見るど木の下さ二。三人えで何がさわいでえだけど。わげ聞ぐど、「梨アえっぱえなてらども、木ア高くて竿届がねし、ほろげねで困ってらのだ。」てへたど。屁たれ嫁コア、「おれアほろてけらへて、木の下さ藁敷でたもれ。」てへて、木の下さ藁じっぱり敷がせで、けつくるっとまくて、「ビーッ」とたえだば、梨ア「ボダッ」と落ぢだど。又「ビビーッ」とたえだば、「ボダボダッ」と落ぢできたど。「ビッビガビーッ」の「ボダボダ、ボダッ」て、皆落ぢで、そこの家の人どア大喜びしたど。

そごさ旅廻りの太鼓打ア通りががって、これ見てえで、屁たれ嫁コがらわげ聞で、「それだら、おれど一緒になて、旅廻りすべし。」てへて、二人は夫婦になって、旅廻りの芸人になったけど。おやじア「タンゴンタチマチ、スットコトン」て太鼓たたげば、嫁コア「ビッピガビーのブップガブー」て屁たれで、旅がら旅ど、廻ってありたど。それで嫁コア、青ぐもなねで暮すごどアできだけど。ドットハラエ。